

【問い合わせ】 役場人権推進課 人権推進係 人権啓発福祉センター内
☎096(293)7920



川野健太郎さん (町立大津北中学校教諭)

今回は、大津北中学校で人権教育主任をしている川野健太郎さんに話を聞きました。

○大津北中学校の印象
今年度から大津北中で人権教育主任を務めています。本校に赴任して2年目になります。町をあげて差別を許さず、無くしていくための取り組みを行っている素敵なところだと感じています。

○「七色解放子ども会」の活動
七色解放子ども会とは、差別を無くすために身近にある差別について考え、学級や学校に発信していくための学習会に参加している子どもたちの組織です。

現在は、中学生を中心に、授業の確認を行う学習会を基本に、それ以外にも、日常生活の中で起きる差別などについて考え、どのように行動していくかを話し合うなど、将来差別に負けない力を付けるための学習をしています。

また、教職員も参加し、差別をなくすために自分の立ち位置についての認識を深める取り組みを続けています。

学習会は先生たち自身も自分を見つめ語り合い、共に学

ぶ場となっています。

○大津北中学校の取り組み
昨年11月に人権教育研究指定校の研究発表会を行いました。「人権が尊重されるための授業づくりの方法」「日常的な班ノートの取り組み」「人権学習」など、より実践的な内容を発表しました。

本校で特に力を入れている取り組みの一つとして、「お返し」があります。それは、発表者に対して、感想を話すときに自分の経験や暮らしと重ねて考えなどを発表していくことです。

生徒一人ひとりが「言葉にして伝えなければ思いは伝わらない」「思いを伝えることで自分のことを知ってもらい支え合う仲間になっていく」ということを実感し、この活動を通して互いに差別を許さない仲間となることを目標にしています。

今後も取り組みを続けて、誰もが安心して過ごせる学級、学校を目指します。

一人で悩まず、相談してください

不当な差別、職場・学校でのいじめ、近所でのトラブル、インターネットでの誹謗中傷・プライバシー侵害など、法務局では法務局職員や人権擁護委員が人権に関する相談を受け付けています。秘密は厳守され、費用はかかりません。あなたの悩みの解決のため最善の方法を一緒に考え、必要に応じて事実関係を調査します(ただし、事案によっては調査を開始しない場合があります)。また、電話での相談も受け付けています。

- 場所 法務局内常設人権相談所 (大津町引水710-5)
- 時間 午前8時30分～午後5時15分 ※月曜日～金曜日(祭祭日を除く)
- 問い合わせ 熊本地方法務局阿蘇大津支局 ☎096(293)2272



親子の絆

「育ててくれてありがとう。無事に大人になりました」

大津町成人式を迎えた375人。それぞれの「家族の絆」と「ありがとう」の形があります。今年、新成人を迎えた小林勇斗さんと母・直美さんに普段一緒に住んでも言葉にすることが少ない「お互いへの感謝の気持ち」を伺いました。



小林勇斗さん(引水)



小林直美さん(引水)

生まれ変わりだと思った

勇斗さんは父親に会ったことがありません。勇斗さんが母親の直美さんのお腹の中にいるときに父親の秀隆さんは交通事故にあって亡くなってしまいました。

「息子が無事に生まれたときに私は、父親の生まれ変わりだと思っていました。成長すればするほど似てきています。しぐさが父親の秀隆さんにそっくりで……。会ったことはないのに遺伝子ってすごいですね」と直美さんは笑う。

今でも覚えているのは、勇斗さんが5歳くらいの時に遊園地で迷子になってしまっ、必死に探しているのを必死にこらえながら広い園内をばつんと立って家族が迎えに来るのを待っている姿。

「それから勇斗が弱音を吐いたるところを見ることは少なくなりました。礼儀礼節を身に付けさせたいと始めさせた剣道で、精神的にとっても強くなったのだと思います」と振り返る。

勇斗さんは「実際、剣道が縁で学校も決まり、仕事も決まり、たくさんの人に出会って今があることにとっても感謝しています。仕事も順調で、早く一人前になって仕事を任せてもらえるように頑張っています」と力強く答える。

二十歳を迎えて特に心境に変化

はないという勇斗さん。休みの日は友だちと人気ダンスグループのコンサートに行ったり、ドライブに行ったりするのが今は楽しい。

しかし、やはり優先は家族。「母や家族の助けになりたい思いは常に持っています」と語る勇斗さんは実年齢よりずっと大人に見える。

一人で家族を支え、育ててくれた母には感謝の気持ちをいつも持っているという。

卒業式での母への手紙

「中学の卒業式の全校生徒の前で行った、卒業生代表あいさつの中で、私や家族への感謝の気持ちを素直に発表してくれて、聞いていて涙が止まりませんでした。兄



▲家族そろって撮った写真は直美さんの宝物

が結婚して家を出てからは、家族の中心。私が頼り切ってしまった。それに、『いつもありがとう』と言葉にしてくれるのは本当にうれしいです」と直美さんはしみじみと続ける。「それでもやっぱり……いい人ができたら家を出ることになると思うけれど、二十歳を迎えて息子に対して思うのは、『まわりに迷惑をかける、自分で欲し』ということ、そして、『自分が一人ではないことを意識して感謝を忘れずにいて欲しい』その2つですね」と自慢の息子に笑いかけて、勇斗さんは照れくさそうにうなずいた。

輝きを増す大津町の宝

——大津町に縁のある375人の新成人たちは、この日、大人としてそれぞれの第一歩を踏み出した。すでに社会の一員として活躍している人も、これからの人も成人としての責任と自覚をこれから持つて歩んでいく。この先、大きな困難が待ち受けていることもあるだろう。

しかし、今までの人生の中で一緒に育んだ、さまざまな力を胸に抱き、乗り越えて欲しいと誰しもが願っている。なぜなら、一人ひとりが、町にとってかけがえのない財産だから——。